

電源開発機 正員 有賀 義明
 電源開発機 正員 市川 芳忠
 電源開発機 橋本 龍男

まえがき

原子力発電所の地下立地方式の研究の一環として、当社の沼原（栃木県黒磯市）・御母衣（岐阜県）・池原発電所（奈良県）では、昭和51年より地震観測を実施しており、現在まで各発電所でそれぞれ、11・5・25の地震が記録されている。その観測資料をもとに、地表・地下の地震動特性、地盤の伝達特性を把握・解明するために、FFT（大崎）¹⁾あるいはMEM（日野）²⁾を用いてスペクトル解析を行っているが、ここでは、沼原発電所で観測された地震動の解析例（地表・地下の原波形、地表・地下のパワースペクトル、スペクトルの振幅比）を報告する。併せて、FFTとMEMの比較例、MEMによる非定常スペクトルの計算例を紹介する。

沼原発電所における地震観測

沼原発電所（純揚水式地下水力発電所：675MW）の地震計設置場所を図-1に示す。測定系統は、速度型換振器→全自動感度調整器（微分・積分増幅器）→記録器となっており、地表・地下において、加速度・変位、各々3成分、観測している。

解析手法

解析のフローを図-2に示す。FFTのParzen Windowのバンド幅は0.2Hz、MEMの予測誤差フィルター項数は $2.5 \times \sqrt{N}$ （N：データ数）とした。なお、スペクトルの振幅比は、次式である。 $\text{振幅比} = \sqrt{P_1(f)/P_2(f)}$ $P_1(f)$: Power Spectrum(GroundSurface)
 $P_2(f)$: Power Spectrum(Underground)

結果及び考察

ここで用いた4つの地震の観測記録を表-1に示す。各地震のN-S成分の解析結果を図-3（加速度）、図-4（変位）に示す。

地表と地下の地震動特性：地表で観測された地震動のパワースペクトルは、比較的広い周波数域（加速度で0～15Hz）に分布し、その形状は幾つかのピークを持ち複雑である。地下のパワースペクトルは、加速度・変位ともにだいたい0～5Hzの間にピークが出現し、その形状は、地上に比してシンプルになっている。この傾向は、加速度で顕著である。（図-3、図-4）

地盤の伝達特性：スペクトルの振幅比の示す曲線（伝達関数）を見ると全体として6～9Hzの間にピークが現われ、加速度の場合、振幅比（增幅率）は少くとも2～3となっている。変位の場合も6～9Hzにピークがあり、振幅比は総じて1～2位である。（図-3、図-4中のAmplitude Ratio-図）

FFTとMEM：演算速度が速い（FFT），短いデータでも解析でき、分解能が高い（MEM）という特性から、FFTは長いデータの、MEMは短いデータの解析に便利である。

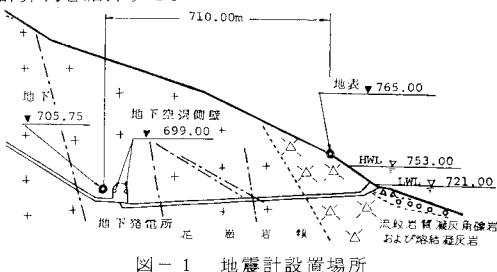


図-1 地震計設置場所

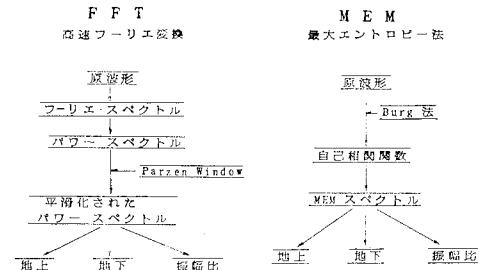


図-2 解析手法

NO.	1	5	6	8*
Date	1977 12.17	1978 3.7	1978 3.20	6.12
Hypocenter N.L. Long.E.	36°36' 141°12'	32°08' 137°44'	36°05' 139°53'	38°08' 142°10'
Magnitude	5.3	(7.8)	5.5	7.4
Focal Depth (km)	40	300	50	40
Focal Distance (km)	130	590	120	230
Maximum Acceleration Amplitude (gal)	Ground Surface N-S E-W U-D	10.9 7.7 6.1	4.4 4.0 1.6	29.9 30.3 9.3
Maximum Displacement Amplitude (μ)	Under Ground N-S E-W U-D	2.2 2.4 1.9	1.8 1.6 1.4	14.5 10.8 8.6
Maximum Acceleration Amplitude Ratio (Ground/Underground)	Ground Surface N-S E-W U-D	156 162 108	304 362 240	234 364 174
Maximum Displacement Amplitude Ratio (Ground/Underground)	Under Ground N-S E-W U-D	62 78 98	517 234 310	235 344 285
Maximum Acceleration Amplitude Ratio (Ground/Underground)	N-S E-W U-D	4.93 3.17 3.27	2.44 2.50 1.12	2.09 2.81 1.08
Maximum Displacement Amplitude Ratio (Ground/Underground)	N-S E-W U-D	2.51 2.09 1.10	0.59 1.55 0.77	1.25 1.06 0.61

*: 宮城県沖地震

表-1 地震観測記録例

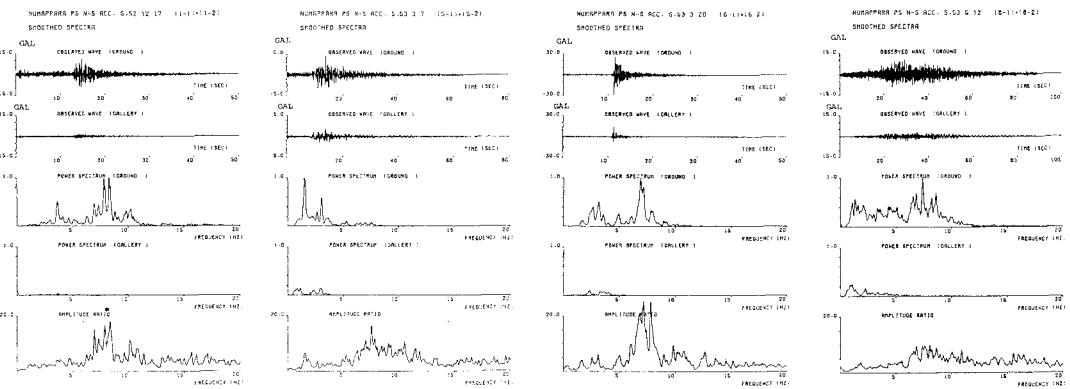


図-3 地震動解析例（加速度，N-S成分：No.1, No.5, No.6, No.8）

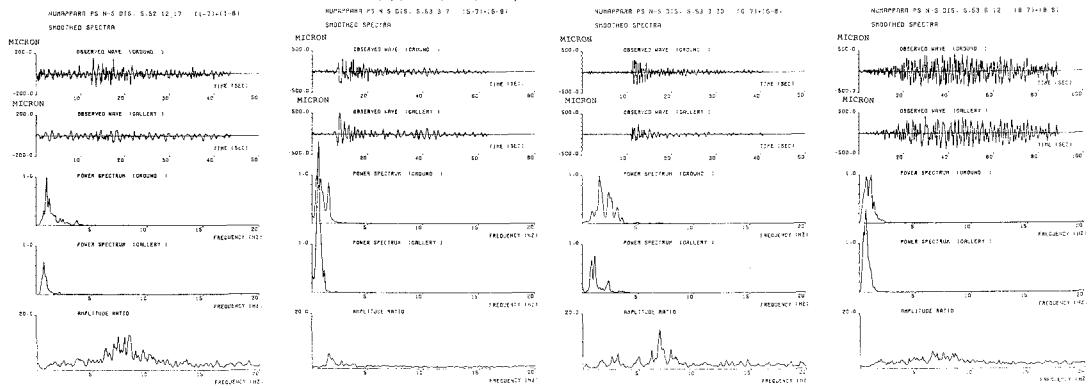


図-4 地震動解析例（変位，N-S成分：No.1, No.5, No.6, No.8）

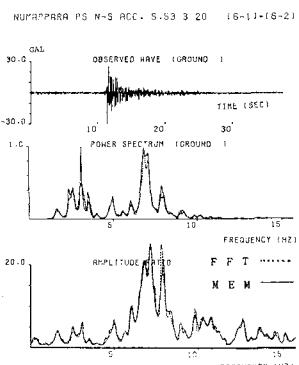


図-5 FFTとMEM

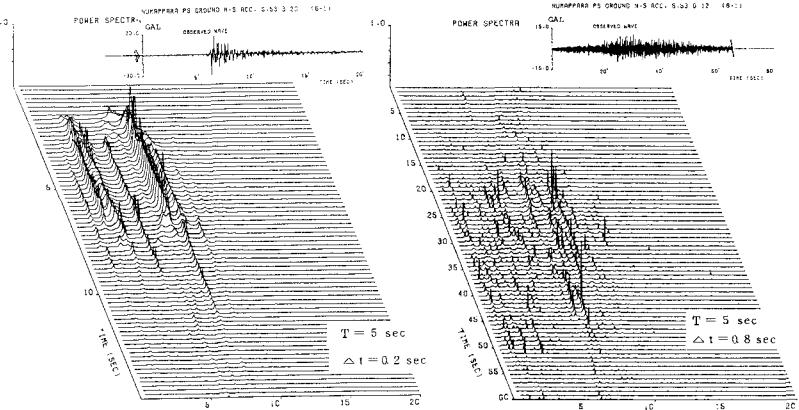


図-6 非定常スペクトル計算例(MEM)

スペクトルの経時変化：T秒間の解析区間を Δt 秒づつ移動させながら求めたラニングスペクトルを図-6に示す。

最大振幅を含む主要動の10~20秒間にその地震動のスペクトルを特徴づけている。（図-6）

あとがき

地下の地震動のパワースペクトルは、地表に比べその形状が単純化され、分布する周波数域も0~5Hzと限られ振幅は加速度で地表の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ 以下（変位では地表・地下、大きな差がない）という解析例を得ているが、このような結果が、地盤性状・地形等とのどのような関係にあるのか、今後解明して行くべき事と考える。

解析計算に当っては、佛開発計算センター 鈴木一永氏 のご協力を得ました。記して謝意を表します。

〔参考文献〕 1) 大崎順彦：地震動のスペクトル解析入門、鹿島出版会(1976) 2) 日野幹雄：スペクトル解析、朝

倉書店(1977) 3) 馬場恭平：ロックフィルダムの地震観測 大ダム 72号、6月(1975)